

---

# 終わるセカイで～君がくれたもの～

らむそじん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終わるセカイで君がくれたもの

### 【Nコード】

N7010T

### 【作者名】

らむそじん

### 【あらすじ】

世界が終わるかもしれない。僕は必至で逃げ場を求めて、ようやくたどり着いた。箱舟。その先にあったものは。

激しい雨が降り続き、大波となってやがて世界を飲み込む。あらゆる生物は死に絶える。

助かる方法はたった一つ、箱舟に乗り込むこと。

そうなれば、誰しもが箱舟に乗り込もうとするはずだ。

しかし、そう簡単に事は進まない。

その箱舟には定員が決まっている。全員が助かることは出来ないのだ。

いったい誰を乗せようか。何を基準に乗せる者を分別しようか。

答えは、単純だ。

より優れた人間、より価値ある人間から乗せるに決まっている。

ダンダンダン！

「お願いだ！ 中に入れて！」

僕は、握り締めた拳でしきりに窓を叩いた。

白のTシャツに青いトランクス一枚、その男が僕だ。

外はどしゃぶりの大雨。空はどんよりとした雲に覆い隠され、昼前だというのにやけに暗かった。

「お願いだから！ 助けて！」

僕は箱舟に助けを求めた。

ここに留まっただけで助からない。そう考えた僕は、この世界を捨てて箱舟に乗り込むことを決意した。

しかし、その箱舟には入り口となる扉が付いていなかった。

一体どうやって中に入るのか、まったく検討がつかない。ただ、

一つだけ窓があった。そこからは中を覗くことができる。ここからなら、どうにかして中に入れるかもしれない。そのような結論に至った僕は、今こうして必至に窓を叩いているというわけだ。

……が、しかし。

何度叩いても、何度叫んでも、誰も見向きもしてくれない。僕の声に耳を傾けてくれる者は、一人もないのだ。中にはたくさん人がいるのに。手を伸ばせば届きそうなほど、近くにいるのに。無常に時間が過ぎていくばかりだった。

「どうせ、僕なんか……」

理由は分かっていた。

要は、僕が落ちこぼれなのだ。

箱舟の中には、弁護士や医者、エリートサラリーマン、運動選手、売れっ子漫才師にイケメン俳優、子供だっているが将来有望な子たちばかり、なにかしら個性を持った人達で溢れかえっている。それに比べて僕ときたら。

三十五歳で、独身、大学を中退してフリーターと派遣生活を続けてきた、これといった特技もない、落ちこぼれの能無しだ。

「くそっ！　なんで僕はこんなに無能なんだ！」

握り締めた拳によりいつそう力を込める。何か特別な能力を持って生まれてこなかった自分に憤りを感じた。頭もよくない、顔も中の下、運動会だつてせいぜい四等賞が関の山。まさに負け犬という言葉を形にしたような人間、それが僕だ。

でも、だからと言ってそれだけで、僕がこんなに軽蔑されるなんて納得がいかない。

人間一人に違いなんてないじゃないか。

そう思えたら余計に腹が立った。

「なんでだよ……。僕が一体、何をしたって言うんだ。僕だけ助からないなんて、不公平じゃないか」

いつそのこと窓を叩き割ってやろうかと思った。

でもそれはしなかった。出来なかった。

もし窓を壊せば中の人達まで助からない。僕はそれを知っていた。箱舟に乗せてもらえるように、中の人を説得するしか手はなかった。「もう、時間がない。お願いだ！　なんでもする、雑用だつて構わ

ない、だから！ 僕を中に入れて！」

藁をもすがる思いで声を上げ、繰り返し繰り返し、窓を叩いた。疲れて次第に腕が重くなってきた。悔しくて、悲しくて、それに恐怖やら不安やらがないまぜになって、僕の胸を締め上げた。腕の感覚が麻痺していくのを感じた。

もう、駄目かもしれない。

諦めかけたその時。

ふと目の前に、一人の少女が現れた。窓の内側から、こちらの様子を見つと伺っている。

年齢は十五・六といったところだろう。学校の帰りだったのか、学生服を着ている。腰にまで届くほどの長い黒髪に、整った顔立ち、まだ幼さが残るが美人という言葉が似合いそうな、可憐な少女だった。

その姿はとても眩しく見えた。こんなにも切羽詰った状態なのに、箱舟の中に住まう天使かと思っただぐらいに、とても輝いていた。

きっと、この子は僕を見捨てない。神々しいその姿を目の当たりにして、僕はそう確信した。

そして残ったわずかな力を振り絞り、彼女に助けを求めようとした。

「僕を」

「あなたは」

すかさず、僕の言葉を彼女が遮ぎった。

神妙な面持ちで、僕に強い視線を投げかける。

そして、僕の期待はあまりにも無残に、打ち砕かれた。

「あなたは、今まで何もしてこなかったわ。よくよく考えてもらいなさい。ただ、毎日をそれなりに楽しく、なあなあと過してきた。自分はバカだからと言い訳をして、なにかを成そうとしなかった。努力を怠ってきた。そして、その結果が今のあなたよ。それを棚に上げて、こんなときだけ助けを求めようっていうの？」

彼女の言葉が鋭い刃となって、僕の胸に突き刺さった。

僕は足元から崩れ落ちた。

そうだ。

僕は、今まであらゆる事から逃げ続けてきたんだ。賢い人間と落ちこぼれの自分とじゃ住む世界が違う、そう信じていた。どうせ能無しに僕なんかじゃ何も出来やしないと思っていた。それならばいつそ何もしなければいい。そうやって努力することも忘れ、ただのうのうと人生を送ってきた。

でも、本当は分かっていた。自分をそうやって低く見積もって楽な道を選んでいったんだ。

長い間ずっと頭の片隅にあった違和感が、ようやく形となって姿を現したような気がした。

彼女の言ったことはもつともだと思えた。

人間一人に違いなんてない、そう叫んだ僕自身が人間に違いを作つて、逃げ続けてきたんだ。

こんなときだけ同じ人間として見てもらおうなんて甚だおかしいじゃないか……。

彼女の言葉を聞いて、僕は、自分の弱さを恥じた。

そして、後悔の念にさいなまれた。

思い返せば、僕の人生は一体何をしていたんだろう。山もなく、谷もなく、まっすぐに引かれた白線のような人生。果たして僕の人生に価値はあったのだろうか。何十年と生きてきて、僕は何か価値あることをしたんだろうか。いや何もしちゃいない。ただ、漠然とその日その日を生きてきたただけだ。先のことなんか考えてこなかった。今が楽しければそれでいいと思っていた。そして今日までのうのうと生き長らえてきた。こんなことならいつそ生まれてこなくても良かったんじゃないか。いやむしろ生まれて来て、迷惑だったんじゃないか。僕が使った二酸化炭素がもつたいなかったような気さえる。それならば、もう今ここで死んでしまったほうが

考えれば考えるほど思考がマイナスに働いた。底なしの闇に、ずいずいと引き込まれていく気がした。泣きそうになった。

僕は俯いたまま、彼女に何も言い返さないでいた。

心なしか、雨がますますひどくなっていくのを感じた。

「……くすっ」

彼女に笑われた。

「あははっ」

好きなだけ笑ってくれ。こんな惨めな僕を、笑ってやってくれ。

「ふふふ、大丈夫よ。あなたはもう、大丈夫」

「……え？」

大丈夫とはなんのことだろう。彼女の謎めいた言葉に僕は顔を上げた。

そこには、やはり天使がいた。

闇の世界に届いた、一抹の光のような、そんな眩しい笑顔をした天使だった。

彼女はこぼれそうな笑みを浮かべて、続けた。

「今までのあなたは、たしかに白線のような存在だったかもしれない。でも、白線にはその先があるの。それを自由に書き足せばいいわ。あなたの好きなように。決して、まだ遅くはない。大丈夫、あなたならきつとやれるわ」

彼女の背後には、ありもしない翼が見えた。

僕の目から、ふいに涙が溢れ出す。

「君は、こんな僕でも……信じて、くれるんだね」

ぐひぐひつと引きつりながら、Tシャツの腹の部分で涙を拭う。

絶対絶命のどん底にいるような僕を、励ましてくれるなんて。君は、やっぱり天使だ。

嬉しさのあまり、しばらく涙が止まらなかった。Tシャツの腹部に、丸い模様を描いてしまった。

ありがとう。君のその期待を一心に受けて、必ずやってみせる。成し遂げて見せる。僕は彼女にそう誓った。

涙を拭いて、威勢よく立ち上がる。

ボタン！！

扉が開放された。

箱舟に扉は付いていない。

僕の背後にある扉、つまり僕の部屋の扉が開いたのだ。

そして、やたらに大きな声が耳に入ってきた。

「もうっ！ 何回呼べば降りてくるのよ！ お昼ごはん冷めちゃうわよ！ あんたさつきから自分の部屋でなにやってるの？ ドンドン、ドンドンと、なにかを叩いて、お隣から苦情でもきたらどうするの。あ……また、パソコンやってたんでしょ？ どうせまた、女の子がいっぱい出てくるようなアニメ見てたんでしょ？ いい年して、お嫁さんも探さないで。母さん、早く孫の顔が見たいのに。本当にどうしてこうなったのかしらね。そりゃ、母さんの育て方も悪かったと思ってるわよ？ でも、少しぐらい親孝行してくれたって、バチは当たらないと思うわ」

母親は話し出すと止まらない。ノックもせずにドアを開け、僕の背中に向かって機関銃のようにしゃべり出す。

「とにかく、お昼ごはん作ってあるから、早く下に降りてらっしゃい。そんな格好じゃ風邪引くから、ちゃんとズボン履きなさい。あ、あと、その求人情報誌持ってらっしゃい。あんた昨日、派遣クビになったんだって？ 会社から電話かかってきたわよ。もうなんで早く言わないのよ。アドバイスぐらいしてあげるから、そこに散らばってるの全部持ってらっしゃい」

そう言い残して、下の階へ降りて行った。

僕は自室の真ん中で、直立しながらパソコンを眺めていた。

「……くくくっ」

笑いそうになった。何も知らない母親。まだ僕を、さつきまでのダメな僕だと思ってるんだ。

両手を広げ、天を仰いだ。

いつの間にか雨は止んでいて、お日さまの光がさんと部屋の窓から差し込んできた。

「僕は、生まれ変わったんだ！」

飛び跳ねたい衝動に駆られた。

今までの僕はもういない、これからの僕はなんでもやれる。そんな自信が、からだの奥底から湧き出るように溢れてきた。

視線をパソコンのモニターに戻した。そこには僕をここまで導いてくれた彼女が、いた。何度見ても美しい。

「君は僕に教えてくれた。厳しくも優しい君の言葉が、僕を救ったんだ」

彼女には心から感謝をした。それでもし足りないくらいだ。

「君はまさに天使だ」

彼女に向かって語りかけた。

「よしっ、決めた」

歯切れよくそうつぶやいて、僕は高らかに宣言した。

「今日から君は、僕の嫁だ！」

こうして僕にめでたく伴侶ができた。母親はそれを知らない。

僕はその場にかがんで、床に散らばっていた求人情報誌の中の一冊を、ぐっと握った。

ここから僕の、新たな人生が始まるんだ。そう考えるだけで胸が高鳴る。

「よしっ！ 仕事探そう！」

勢いよく部屋を飛び出した。

パソコンに映し出された彼女はいつまでも、笑顔で僕を見守っていてくれることだろう。

(後書き)

なぜ、これを書いたのかは謎です。  
多分、初めて完成させた小説だったはず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7010t/>

---

終わるセカイで～君がくれたもの～

2011年9月19日03時32分発行